

## 「革命前後」 (火野葦平) 其の二

終戦から四日目、昌介は一旦福岡から若松の自宅に戻る爲汽車に乗ると、混合ふ車内の片隅に兵隊が一人押附けられて立つてゐた。三十がらみの朴訥ぼくとさうな下級兵で、「顔を見られたくないやうに」、暑いのに手拭で頬被りをした上に汚れた戦帽を被り、シャツは汗と泥に濡れ、大きな荷物を身體の前で抱へてゐる。「罪ををかしてでもゐるやうな肩身の狭さがあつた」が、他の乗客達は「眼も白く」、慰めの言葉をかけるでもなく立つて席を譲るでもない。昌介は「齒ぎりしたい思ひ」になつた。出征時は日の丸と萬歳の歡呼かんこで送つた兵隊なのに、今は誰も相手にせず、ソツポを向いてさへゐるのだ。敗戦ゆゑの「あらゆるものの價值轉換」の銚ほこまき先は眞つ先に軍隊と兵隊に向けられるのだらうが、「しかし、兵隊になんの罪があるのか。兵隊よ、胸を張れ」と昌介は叫びたかつた。

若松駅に着くと、昌介は駅舎の一室の奇妙な光景を見た。七八人の駅員達がせつせと紙の小

旗を拵へてゐる。米國の旗、英國の旗、支那の青天白日旗、ソ聯の赤旗。昌介は「いきなり腦天に雪崩でも落ちて來たやうなげしいショックを受けた」。「終戦後まだ四日目」だといふのに、「占領軍が進駐して來たときに出迎へる旗を作つて」ゐたのだ。昌介は「胸がムカムカして來た。泣きたい氣持になつて來た」。

だが、以上は「敗北によつてまきおこされた日本人の動搖する姿と心」の極く一斑でしかなかつた。敗戰國の變貌は凄しく、戦前は「常に一億特攻の精神を説いてゐた人々」が「(八月)十五日を幾日も過ぎないうちから新日本建設を論じ」、「占領軍の鼻息をうかがふ日本人」が跳梁跋扈し、「アメリカ人の尻馬に乗つて同胞たる日本人を裁かうとする風潮」が蔓延し、「昨日は指導者として重きをなしてゐた人々が、今日は外人相手のダンス・ホールの經營に没頭し、今や「官民を問はず、確固たるヤミの秩序が巷を支へ」る爲體。そしてさういふ風潮を苦々しく思ふ昌介すら、「ヤミ」に頼つて家族を養はうとして、「ヤミ」への「羞恥」がいつしか薄らいでゐる己れ、もはや「一介のヤミ屋」に過ぎぬ己れに忸怩たらざるを得ない。そんな己れが嘗て「ミズーリ號」上での降伏調印式の直後、最後の述作の覺悟で「悲しき兵隊」なる一文を草して、日本人の「道義と節操の確立を説いた」とは、とんだお笑ひ草ではないか。

如何にも火野らしい自責の吐露だが、昭和二十年九月初旬の朝日新聞に掲載され、「革命前後」に全文が引用された「悲しき兵隊」も亦、火野ならではの痛憤の爆發に他ならない。敗戦といふ「現象」即ち目に見える現實の變化に振回されて、「戦時と戦後とでころりと變つてしまふやうな輕業師」さながらの輕佻浮薄、即ち「道義の頹廢と、節操の缺如と」こそが實は「抜きがたく根本的」な、「敗北の眞の原因であつた」のだが、それが「戦後もズルズルベツタリに引きつがれるといふことになれば、いつたいどういふことになるか」、といふのである。

最後に、「現象」に振回されずして人間性の「本質」を直視した火野の言葉の幾つかを拾つて置かう。「人間は死さへも虚榮きよえいで飾る」、「人間は生きる意味もつかみ得ないまま生きてゐると同様、死ぬ意味もつかみ得ないままに死ぬこともあるのだ」、「勝敗は現象であつて、正邪や善惡を定める眞實しんじつの鏡ではない」、「日本軍もアメリカ軍もないのである。戦場ではみんな鬼となり、勝てば倨傲きよがうのふるまひをするのだ。(中略)民族は違つても、人間の心に變りはなく、現象は變化しても人間に革命は起らない」。火野葦平、讀むべし、である。

(「革命前後」、中央公論社)